

工芸の潜在力 欲求喚起の仕掛け必要



いなが・しげみ 1957年生まれ。東京大
人文科学研究科単位取得退学、パリ第七大博士
課程終了。国際日本文化研究センター助教を経て2004年から現職。美術史・文化交渉史
専攻。編著に「伝統工芸再考・京のうちそこ」
「ものけいろ」など多数。

隣国はソウルの空の玄関、
インチョン空港の出発ロビー
で、不思議な光景を見た。出国
審査場を出ると、免税店が扇
形に広がり、搭乗サテライト
に向かう通路の角には、落ち
着いた雰囲気オープン・ラ
ウンジが見える。だが席に腰
掛けたお客たちは、机に向い、
なにやら一心不乱で、作業に
没頭している風情なのだ。

こんな場所で、まさか写経
でもあるまい。訝しがって覗
いてみると、集まった人々は、
色とりどりの絵筆を手に取
り、見本を横目に、團扇の絵
柄の塗り絵に動かしんでいるこ
ころだった。

場所は飛行機の搭乗客が必
ず横切る一等地。伝統工芸の
制作表演ならば、珍しくない

国際日本文化研究センター教授 稲賀 繁美

だろう。だがここインチョン
では、乗客を巧みに誘って、
即席の体験学習へと導いてい
る。一刻の気分転換はなかなか
に好評らしく、このコーナ
ーはいつ見ても、かなりの盛
況ぶりを呈している。立ち寄
る度に、一服の精神的清涼剤
として、このコーナーを利用
する常連の外国人ビジネスマ
ンもありそうだ。

この光景を目にして、はた
と気がついた。工芸の再活性
化には、発想の転換が必要だ。
商品としてどのように売り上
げを伸ばすか、といった経営
上の利潤追求ばかりが問われ
ている。しかしそれより前に、
工芸の潜在性発掘のために、
は、もっと大切なことがある
と。

空港での待合時間。たとえ
僅かな空き時間の疑似体験で
も、うまく設定すれば、人々
の手仕事への欲求を引き出す
ことができる。それがやがて
は職能への興味や関心を高
め、将来の担い手となりうる

人材の層を厚くし、さらに購
買欲を高めることにも繋がる
だろう。

手を動かして物を作る営み
は、精神に安らぎを与え、あ
くせくとした日常の生活から
ひととき離脱して、警沢なま
でに濃密な時間を約束してく
れる。そうした大切な心のゆ
とりを回復する機会として、
手仕事のお稽古は、きわめて
有効な精神療法的効果を発揮
する。

思えば農作物も、育てた農
家の個人名を記した販売が流
行を見せている。効率一点張
りで無名な流通機構に頼った
物流が信頼を損ね、時間と手
間隙をかけ、生活の質を重視
する一品生産の人的交流志向
が、時代の潮流となりつつあ
る。そこに工芸を乗せる工夫、
柔軟な発想が、今求められて
いる。

工芸の危機が叫ばれて久し
い。だがそこには根深い誤解
が巣くっている。そもそも「工
芸」とは、西洋から移入され

た「美術」界から閉め出され、
機械産業界からも取り残され
た、残存領域に付けられた名
称だ。起源からして他律的な
工芸は、その存立基盤におい
て危機を体現しているのだ。

加えて工芸は美術という領
域を生み出す母胎であり、美
術が生まれ落ちると捨て去ら
れる胞衣に等しい。工芸とは
美術の潜在的可能態であり、
美術という意識の発露を促す
無意識の蔵、創作の源泉たる
地下水脈だ。

さらに工芸史の遺品には、
古からの手仕事の技能が、無
言の智慧として埋蔵されてい
る。それを発掘し蘇生させる
のは、後世の歴史的責任とな
るだろう。

「伝統はまた伝燈とも綴る。
後世に燈明を絶やさず伝える
燈の灯芯としての工芸。魂を
癒やし育む潜在力の汲み上げ
が、いま期待されている。」

